



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第3主日 A年 (2023年3月12日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：出エジプト記 17章3—7節

第二朗読：ローマの信徒への手 5章1—2、5—8節

福音朗読：ヨハネによる福音書 4章5—42節

## 水

どの宗教でも、水には人間や世界を浄化する力があると信じられています。ですので、日本の古来の宗教でも、水のもつ「清め」の意味に注目してきましたし、現在でも手水や滝行のような習慣があります。聖書で水は、二重の意味を与えられているようです。いのちにとって不可欠である水をめぐっては数々の奇跡がありますが、一方で水は清浄、罪の贖い、再生の象徴でもあるからです。そんなパレスチナ地方での水についての理解を背景に、今日の福音朗読の中でイエスさまは「永遠の命に至る水」（ヨハ4章14節）について語るのです。

キリスト教信仰においても水には特別な意味があります。なぜなら水は、洗礼の時の水を思いこさせる「しるし」だからです。聖水や灌水（水による祝福）は、洗礼の時に「罪が洗われ、新しい人として再生した」ことを思いこさせるものです。決して清めの意味ではないことに注意しましょう。

第一朗読の3節に「渴く」とあります。これに注目してください。

イスラエルの民にとって荒れ野の旅は、苦労と試練の連続でした。水と食べ物の不足について不平が生じました。その度に神は民を養います。マラで苦い水を甘いものに変え（出15章22-27節）、シンの荒れ野では食物としてマナを与えます（出16章1-36節）、そして、今日の朗読箇所ではレフィディムに宿営した際に、民に飲み水が足りなくて、神はホレブの岩から水をほとぼらしさせます。

3節の「わたしの子供たちも、家畜までも渴きで殺すためなのか」という強い口調の抗議は、食べ物や飲み水に不自由なく暮らしていたエジプトでの生活を懐かしむ気持ちから生じたものでしょう。同じく3節をフランシスコ会訳では「不平を言った」となっています。これは、「ぶつぶつ文句をいう」と

いう意味だけでなく、モーセの指導力への疑問と不信も含んだ内容となると考えたらよいでしょう。つまり、イスラエルの民は、「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのか」(3節)と、荒れ野の旅そのものの意味に疑問を抱いているのです。「渴く」はツアーメー、「渴き」はツアーメーだそうですが、肉体的な渴きだけではなく、精神的な渴きをも表すことばです。

第二朗読を省いて、福音朗読に移りましょう。今日の福音朗読は「サマリアの女」の話です。

『ヨハネによる福音書』の第三章で、イエスさまがどなたであるかを知っていると自負するニコデモが登場します。しかし、イエスさまとの会話を続けるうちに、彼がイエスさまのことをしっかりと分かっていないことがあきらかになります(3章1-21節参照)。今日の朗読箇所(4章)を越えて五章では、イエスさまはエルサレムで病人を癒しますが、ユダヤ人たちは「神を御自分の父と呼んで、御自身を神と等しい者とされた」(5章18節)とイエスさまを非難し、殺そうと機会をうかがいます。まさに、福音書の冒頭にあった「み言葉は、自分の民のところに来たが、民は受け入れなかった。」(1章11節)ことが実現したのです。この二つのユダヤ人がイエスを信じていないという出来事(4章)の間(4章)では、サマリアの女(4章1-42節)とガリラヤ人(4章43-54節)という当時のユダヤ社会では取るに足らない存在の人々がイエスさまを信じるようになる物語があります。ユダヤ人の不信仰とサマリア人とガリラヤ人の信仰が対照されます。

イエスさまとサマリアの女との長い会話が続きませんが、前半は「生ける水」に関する対話(4章1-15節)、後半は「新しい礼拝」に関する対話(16-30節)と分けて考えることもできます。そして会話の後に福音を宣べ伝えることについてのイエスさまのことばが続き(31-42節)。

ヤコブの井戸は、サマリア人たちの民族的なアイデンティティと関わります。ヤコブから始まる宗教的伝統の中で生きているというサマリア人の自負がありました。サマリア人自身がエルサレムの神殿で神を讃えるユダヤ人と一線を画していたのです。この背景に即して考えてみると「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」(9節)の一節の意味が分かってきます。

## イエスとは誰なのか？

第一朗読では、「渴き」を覚えるイスラエルの民(人間)と、それを癒す主なる神の働きがテーマでした。それを受けて、福音朗読ではイエスが「旅に疲れて、……井戸のそばに座っておられ」(4章6節)、渴きを覚えて「水を飲ませてください」(7節)と願うところからサマリアの女との出会いと交わりが生まれていきます。水を願ったイエスは、いつの間にか水を与えるものへと移っていきます。「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」(15節)。イエスさまと女との深い対話を通じて、わたしたちはイエスさまがどなたであるかが分かるようになるのです。